



・アリサの場合

ビーチで目隠しをされ、その場で五回転させられたアリサは混乱した。スイカ割りが初体験だったというもあるが、砂浜というただでさえ不安定な足場に、平衡感覚と視覚を奪われた上で放置される。そのこと自体が、アリサにとっては思った以上に恐怖だったのだ。

「え、ちょっと、これ、立ってられな——」

普通に直立しているだけで足元がふらつく。周りで生徒会の面々が「前、前——」とか「そのまま真っ直ぐ——」とか指示を出しているが、そもそも立っているだけで精一杯なのだ。そんな状態で、無理に足を前に出せば……

「う、あ、っと——」

案の定、一歩踏み出した時点で足がもつれ、アリサはたたらを踏むように数秒前に出ると、砂浜に棒を振り下ろした。というか、倒れそうになってとっさに棒でバランスを取ったというのが正解だろう。

周りの面々も、それを察してなんとも言えない顔になる。

「(……) いっぱん面白くないやつ」

「(おいやるの)」

妹と兄が囁き交わす中、統也が数秒前にな表情で「次からは二回転にしようか」と告げるのだった。

・有希の場合

有希は空気が読める女だ。プライベートではともかく。公の場では常に空気を読み、和を乱さぬ行動を心掛けている。当然、この場における自分の役回りというのも、重々理解していた。

二番手であるじぶんの役目は適度な場の盛り上げ役。まだ順番待ちがたくさんの状態で、早々にスイカを割るわけにはいかない。そういうのは後半の本命組に任せるべきだ。

そう、分かっている、分かった上で……有希は今回、あえて空気を読まないことにした。大人げなく、本気でスイカを割りに行くことにした。

「ふふふ、あたしがここであっさり成功したら、アーリヤさんはどんな顔するかな？」

内心黒い笑みを浮かべながら、有希は慎重にスイカの位置を探る。そう、全てはライバルの悔しがる顔を見るため。そのためなら、有希はあえてお約束を無視する。

（みんなも、まだ本気で割らせようとはしていない……でも、何も問題はない。指示なんてなくても、スイカの位置は分かる）

虚実入り乱れる周囲の指示を意識から外し。有希はその他の音に意識を集中した。そう、聞き分けるべきは……スイカの下に敷かれた、ビニールシートがはたけく音。風に煽られ、ガサガサとめくれ上がるビニールシート。その音を頼りに、有希は歩を進め——

（ここ——）

確信と共に、棒を振り下ろした。そしてものの見事にビニールシートをぶっ叩いた。単純に自分の腕の長さと棒の長さ……つまり間合いを見切ったのだ。

「……) いっぱん恥ずかしいやつ」

「割りますよ？ 政近君」

・綾乃の場合

綾乃は空気になる女だそれはそれとして、ビーチで目隠しをされ、その場で「二回転させられた綾乃は混乱していた。なぜなら……

「綾乃！ 右前です！」

「サラッ」と俺を狙わせようとするな！ 従者に手を汚させようとしてんじゃねえ！ 綾乃！ 左前だぞ——」

攻撃する二人の主人が、見事に相反する指示を出しているのだ。右に行くべきか、左に行くべきか……迷っている間にも、指示は激しくなる。

「綾乃！ あなたはまはわたくしでしょう!? わたくしの指示に従いなさい！」

「分かるよなあ綾乃！ 俺の指示が正解だって！ 左前だ！」

左、右、左、右……どっちか。でも、どっちを選んでも……

「ちょ、ちよいい！ 綾乃ちゃんがボタンと田ボタンを同時に押されたゲームギアラみたいになってるんだけど——」

綾乃、指示が混線したことによって無事シユート。とりあえず、政近兄と有希はそぼで正座した。

・マリヤの場合

マリヤは空気が読める女だ。前の綾乃で少し数秒な空気がなくなってしまった今、これ以上このレクリエーションが盛り上がることはないと察している。察した上で、そろそろスイカを割るべきだろうと考えていた。

「もうちょっと右です」

「もう二歩、ええーっと、そこで三十度くらい時計回りに回転」

実際、周囲の指示にもあまりやる気がない。そろそろ終わらせようという意思が透けて見える。その意思を余さず汲み取り……マリヤは足元にビニールシートが触れたところ、一思いにほうを振り下ろした。

「ええい！」

振り下ろして……弾かれた。ビニールシートの上でバウンドと跳ねるスイカ。

「……あら」

手応えを感じたマリヤは、その場で振り返り棒を振り下ろす。

「えい、えい！」

上から何度も叩かれ、バウンバウンド小さく跳ねるスイカバウンバウンド大きく跳ねる、マリヤのスイカ。

「いっっぱんおいしいやつだ……」

「おい動画撮るな」

結局、マリヤの腕力ではスイカを割ることは出来なかった、ただ、マリヤの頑張る姿は一部の人間に勇氣と元氣を与えた。なんとこっちゃ。

・茅咲の場合

茅咲は空気を読める女だ、たとえ視界が閉ざされようと、その斜め感覚を総動員して周囲の空気を把握することなど遺作もない。

（……見切った）

スイカの位置を正確に見極め茅咲は音もなく踏み出した。砂地を一切立てることなく、砂浜を跳ぶように駆けると、腰だめに構えた棒を一閃、スイカを飛び越え先で、棒を振り抜いた体勢で残心する。

その背後で……スイカが半ばから断ち切れ、上半分がズスッとスライドし、どしゃりとビニールシートの上に落した。

ビニールシートの上に広がる、真っ赤な果汁その光景に、政近は息を呑み……静寂の中冷静に一言。

「割れよ」